モノグラフ・高校生'83

vol.8　職業科に学ぶ高校生
――過去・現在・未来の生活と意識――

©1983(株)福武書店 教育研究所／加藤智禎・賀川雅子・渋谷周子
東京大学助手／耳塚寛明・東京大学大学院／刈谷剛彦・吉本圭一・樋田大二郎

目次

はじめに ……2

第Ⅰ章　調査の概要と結果の要約……4

1　調査の概要……4
2　結果の要約……5

第Ⅱ章　高校入学までの生活……7

1　中学校生活……8
2　高校受験……11

第Ⅲ章　現在の学校生活……19

1　高校生活の充実度……21
2　中学校生活と比べて……24
3　もし普通科に行っていたら……28
4　職業資格の取得をめぐって……33

第Ⅳ章　将来生活の展望……36

1　進学と就職……37
2　仕事・会社の選択……42
3　職業生活への期待と不安……58
4　家庭生活の設計……61

おわりに ……66

資料1　調査票見本 ……68
資料2　基礎集計表 ……83

はじめに●

「モノグラフ・高校生」シリーズは、本号で第8号を数える。第1号から第7号まで、私たちは、さまざまな角度から現代高校生像や高校教育のかかえる諸問題を明らかにしようと努めてきたが、そこでの調査対象は、専ら普通科に学ぶ高校生とその卒業生に限られていた。

言うまでもないが、普通科に学ぶ高校生だけが高校生のすべてではない。工業科や商業科など、いわゆる職業科に学ぶ高校生は全体の34%、約3分の1を占めている。学校数の観点から言っても、普通科単独設置校は約45%にすぎず、残りの高校は職業教育（専門教育）を主とする学科を設置している。本号は「モノグラフ・高校生」シリーズの中で、はじめて職業科に学ぶ高校生を対象としたものである。彼らを抜きにして、現代高校生像を語ることはできないであろう。

私たちが職業科に学ぶ高校生を語る時、彼らに何か暗いイメージを抱いていたことは否定できないだろう。「不本意進学」「落ちこぼれ」「怠学」「反学校的行動」——職業科高校生の生活や意識は、このようなイメージの中だけで、とらえられてきたと言っても過言ではあるまい。

しかし、これまでの、いわば"暗い"職業科高校生像は、果たして実像なのか。それらは普通科の高校を出て、高等教育を受けた教育関係者や研究者が描いた、"虚像"ではないのか。

今回の調査は、職業科高校生を対象とし、その過去・現在・未来の生活と意識を、"ありのままに"浮かび上がらせることを意図したものである。職業科高校生を、はじめから進学競争からなかば疎外された青年たちと見るのではなく、彼らの過去・現在の体験や将来の夢を、彼らにつきまとう"イメージ"から離れて、見つめ直してみたい——それが、この調査の基本的なねらいである。

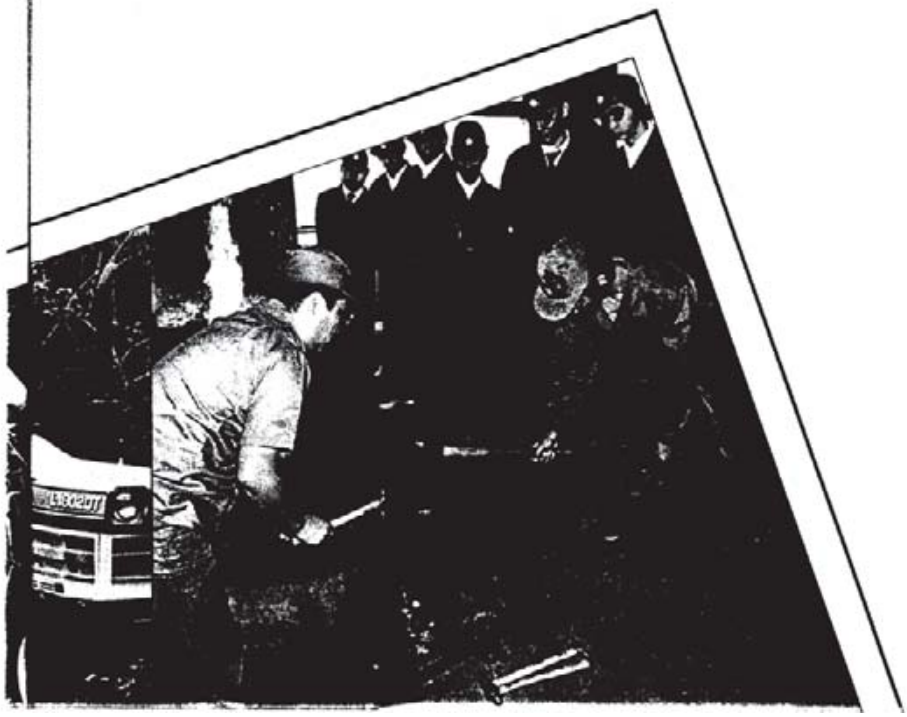
調査の企画

高校教育研究会

代表　深谷　昌志（奈良教育大学教授）
　　武内　　清（武蔵大学教授）
　　明石　要一（千葉大学助教授）
　　穂坂　明徳（神奈川県立港南台高校教諭）
　　耳塚　寛明（東京大学助手）
　　樋田大二郎（東京大学大学院）
　　苅谷　剛彦（東京大学大学院）
　　吉本　圭一（東京大学大学院）
　　田中　雅文（三井情報開発研究員）

本書の執筆分担

耳塚　寛明（東京大学助手）　I　IV－1，3　おわりに
苅谷　剛彦（東京大学大学院）II　III－3
吉本　圭一（東京大学大学院）III－1，2
樋田大二郎（東京大学大学院）III－4　IV－2，4



第Ⅰ章 調査の概要と結果の要約

1. 調査の概要

本調査の実施状況、およびサンプルの構成は次のとおりである。

(1)調査対象

1都2県計3地区にある公立職業科高校(16校)に在学する高校1、2、3年生計7065人。

まず、首都圏一地方の観点から1都2県のうち3地区を選定し、各地区について学科構成を考慮しながら計16校を対象校とした。さらに、各校、原則として1年から3年まで各3クラス計9クラスを対象クラスとし、そのクラスの生徒全員を調査対象とした。

ただし、本報告での分析には学科別構成、学年別構成を考慮して、13校計4583人のデータを用いた。

(2)調査時期

昭和57年6月中旬～7月。

(3)調査方法

質問紙による自計式調査（巻末調査票見本を参照のこと）。

(4)分析サンプルの属性別構成〈数字は人数、( )内は%である〉。

①サンプル総数　4583

②性別構成

男子	女子
2444	2139
(53.3)	(46.7)

③学年別構成

1年	2年	3年
1550	1519	1514
(33.9)	(33.1)	(33.0)

④学科別構成

工業	商業	園芸・農業
1444	2041	1098
(31.5)	(44.5)	(24.0)

⑤性別・学年別構成

1年		2年		3年	
男子	女子	男子	女子	男子	女子
811	739	790	729	843	671
(52.3)	(47.7)	(52.0)	(48.0)	(55.7)	(44.3)

⑥学科別・学年別構成

工業			商業			園芸・農業		
1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年	2年	3年
480	480	484	694	659	688	376	380	342
(33.3)	(33.3)	(33.4)	(34.0)	(32.3)	(33.7)	(34.2)	(34.6)	(31.2)

⑦現在のクラス内での成績自己評価別構成

上位	中位	下位
1039	1853	1643
(22.7)	(40.5)	(35.8)

無回答48(1.0)

⑧高校卒業後の進路別構成

就職・家業手伝い	各種・専修学校	短大	4年制大学	その他・未定
3176	486	137	215	536
(69.3)	(10.6)	(3.0)	(4.7)	(11.7)

無回答33(0.7)

2. 結果の要約

〔高校入学までの生活〕

1 調査対象者の中学3年時の成績は、クラスで上位10番以内が18%、まん中ぐらいが55%、下位10番以内が27%であった(P.10 表II－1)。

2 彼らの中学時代は"暗い"イメージで彩られているわけではない。大多数がクラスメートや教師と良好な関係を持ち、半数の者が仲間の先頭に立って活動したリーダー経験を持っていた(P.11 表II－2)。

3 今の学校にはじめから入学を希望していた者は約4割、他の学校を希望していた者が約5割、どんな高校でもよかった者は1割であった(P.12 図II－3)。他の学校を希望していた者のうち3人に2人が、本当は公立普通科高校を希望していた(P.13 図II－4)。

4 職業科高校という高校・学科の選択が明確になされるのは、進路指導が具体化・活発化する中3の2学期である。この時期に普通科志望者が一挙に減少し、職業科志望者がぐんと増える(P.14 図II－5)。

〔現在の学校生活〕

5 現在の学校生活が全体として楽しい生徒は約半数である。彼らが学校の中でもっともはりあいや楽しさを感じるのは、休み時間

や文化祭・体育祭(約7割)、次いで、音楽・美術・体育の授業やクラブ・部活動（約5割)、専門科目の実習(約45%)である(P.22 図Ⅲ—1)。

6 今の生活を中学時代と比べてみると、一番の変化が、気の合う仲間が増えたことで48%、成績のことで先生から口うるさく言われなくなった者が35%、学校生活が楽しくなった者は32%である。授業が楽しくなった者（19%）や、先生はていねいにわかりやすく教えてくれるようになったと思う者(16%)は意外に少ない(P.24 図Ⅲ—2)。

7 専門科目の授業に対する評価を見ると、将来役に立つと考えている者が74%、普通科目の授業よりおもしろいと思う者が58%に達している(P.28 図Ⅲ—5)。

8 「もし普通科に進学していたら」と仮定してその場合の生活を想像させたところ、受験勉強のあくせくした雰囲気に息がつまるだろう(64%)、勉強が難しくてついていけないだろう(55%)という回答が目立った。普通科に行った方が、もっとハリのある生活ができるだろう(22%)、地域の人は今より自分を高く評価してくれるだろう(25%)という想像は少なかった(P.29 表Ⅲ—4)。

9 各種職業資格の取得数は、平均すると、商業科2.3個、工業科1.0個、園芸・農業科0.4個であった。資格取得のための勉強のほうが他の勉強よりもやる気が出るという者は約3分の2に達する。また、資格が取れて自分の能力に自信がついたという者は51%もいる(P.35 表Ⅲ—5)。

〔将来生活への展望〕

10 高校卒業後の進路を予測させたところ、就職＝69%、各種・専修学校＝11%、短大＝3%、4年制大学＝5%であった。高校卒業後に就職を希望する者のうち大多数は、上級学校への進学をあきらめて就職へまわったわけではなく、これまでに進学しようと計画したことのない生徒たちである(P.39 図Ⅳ—2)。

11 彼らが将来つきたいと思う職業のベスト5は、エンジニア、栄養士、保母などの専門・準専門職(27%)、事務職(25%)、技能工・工員(11%)、販売・サービス職(8%)、自営業(8%)であった。

12 どのような基準で仕事や会社を選択するのか、その基準を分析してみると、

①〈外面志向的か内容志向的か〉会社の規模、安定性、給料の高さなど外面的なもので選ぶか、仕事の内容で選ぶか

②〈達成志向的か安定志向的か〉バイタリティとチャレンジ精神にあふれ、何かを達成しようとする気持ちを重視して選ぶか、安定志向的基準で選ぶか

という2つの基準が重要であった。この2つの基準によって、生徒の仕事・会社選択の仕方は、(1)安全型(2)受容型(3)創造型(4)獲得型の4タイプに分けることができる（P.45 第Ⅳ章第2節)。

13 高校卒業後の初任給(月額、手どり)を予測させてみると、男子約10万7千円、女子約9万6千円であった。彼らはそれを、自分の生活費や小遣いに半分、貯金に4分の1、親の家計を助けるのに4分の1ずつ使おうと計画している(P.58 図Ⅳ—13、P.59 図Ⅳ—14)。

14 彼らは就職後の社会生活に、おとなとして扱われること(69%)、今以上にはりあいのある生活(55%)を期待する反面、一人前に仕事ができるか(74%)、職場でうまく上司や同僚とつきあえるか(73%)など少なからぬ不安を持っている(P.60 表Ⅳ—9)。

15 22歳までに親から独立して一人で暮らし、25歳までに結婚し、28歳までに子どもをもうけるというのが、彼らの一般的な将来設計である（P.62 図Ⅳ—15)。家庭では1か月に1度は夫婦で外食し(87%)、お弁当を毎日作り〔作ってもらい〕(85%)、夫にまあまあの収入があれば妻は家庭の中にいたい〔いてほしい〕(82%)と考えている（P.63 表Ⅳ—10)。

第II章 高校入学までの生活

中学卒業者のうち、毎年、約50万人が高校の職業科に進学している。これは、中学卒業者のおよそ30%を占める。どのような生徒が、どのような理由で、職業科を選んだのだろうか。本章では、職業科高校生の"現在"の姿を浮き彫りにするために、まずは彼らの"過去"を明らかにする。

高校進学率が95%を超え、短大・大学進学率も40%近い今日、「職業科」というと、暗いイメージを抱く人がいる。中学校での成績が悪くて、普通科に行けなかった者たちが職業科に進むのだろう、と考える人もいる。「落ちこぼれ」、「不本意就学」といった言葉を思い浮かべる人も少なくない。一部の職業科高校の「荒廃」から、その原因が入学してくる生徒の質によるのだと考える人もいる。しかし、職業科に向けられるこれらのイメージは、本当に正しいのだろうか。果たして、職業科に進学してくる生徒の"過去"に、「落ちこぼれ」といった言葉はあたるのか。そして、彼らは、普通科に行けないから、しかたなく職業科に進学したのだろうか。ここでは、調査の結果から、これらの問題を明らかにしていく。中学時代の生活や高校選択の過程の実態を明らかにすることによって、彼らの高校入学までの軌跡をたどっていくことにしよう。

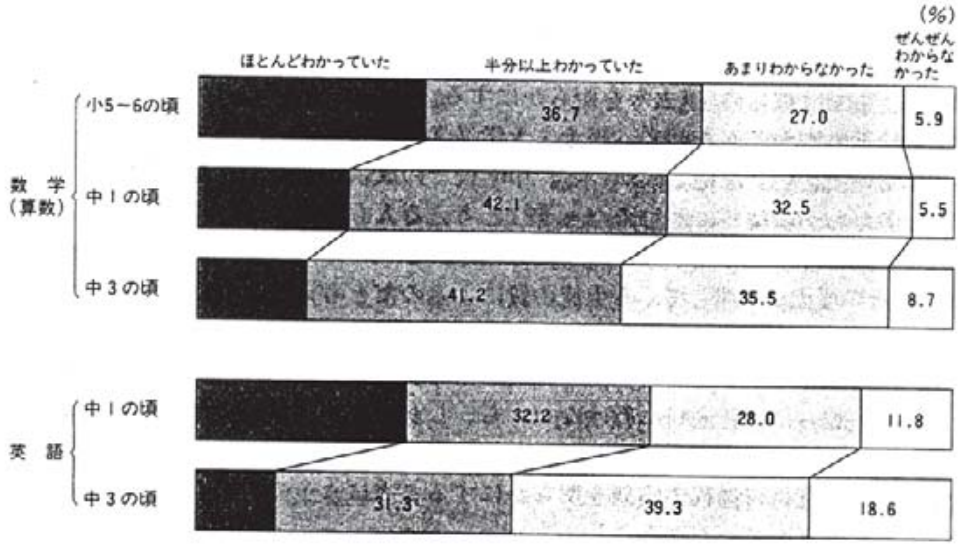
1. 中学校生活

(1)学業面からみた中学校生活

まずはじめに、学業面から見ることにしよう。図II—1は、数学(算数)と英語について、小・中学校時代の授業の理解度を示したものである。数学(算数)について見ると、授業を「ほとんどわかっていた」者は、小5～6の頃は30%、中1の頃は20%、中3の頃は14%である。これに、「半分以上わかっていた」者を加えると、小5～6の頃=67%、中1の頃=62%、中3の頃=56%と、いずれの学年でも半数を超える。また、逆に「ぜんぜんわからなかった」者の割合を見ると、小5～6の頃=6%、中1の頃=6%、中3の頃=9%である。これに、「あまりわからなかった」という者を加えると、小5～6の頃=33%、中1の頃=38%、中3の頃=44%になる。数学(算数)の授業が理解困難だった生徒は、すでに小学校高学年で3分の1を占め、中3では4割を超える。基礎教科の1つである数学で、理解困難な者がこれだけの比率を占めることは、職業科の高校が、専門的職業教育を施すことが、いかに困難なことであるかを予想させるものである。とはいうものの、他方、どうにか中学までの数学を理解している者が半数以上いることも忘れてはならない。職業科の生徒の大部分が、数学の授業についていけなかった、というわけではないのである。

それでは、英語の授業はどうだろうか。まず、中1の頃を見ると、「ほとんどわかっていた」は28%、「半分以上わかっていた」は32%、両者を合わせて60%の者はどうにか英語の授業を理解していた。ところが、中3の頃になると、「ほとんどわかっていた」は11%、「半分以上わかっていた」は31%である。逆に、「ぜんぜんわからなかった」は19%、「あまりわからなかった」は39%と、授業についていけなくなった者は合計58%を占める。職業科の生徒の場合、中学までの英語の授業を十分理解できないでいた者は、数学に比べ多数を

図II—1　授業の理解度



注) 無回答・不明は省略した

占めている。

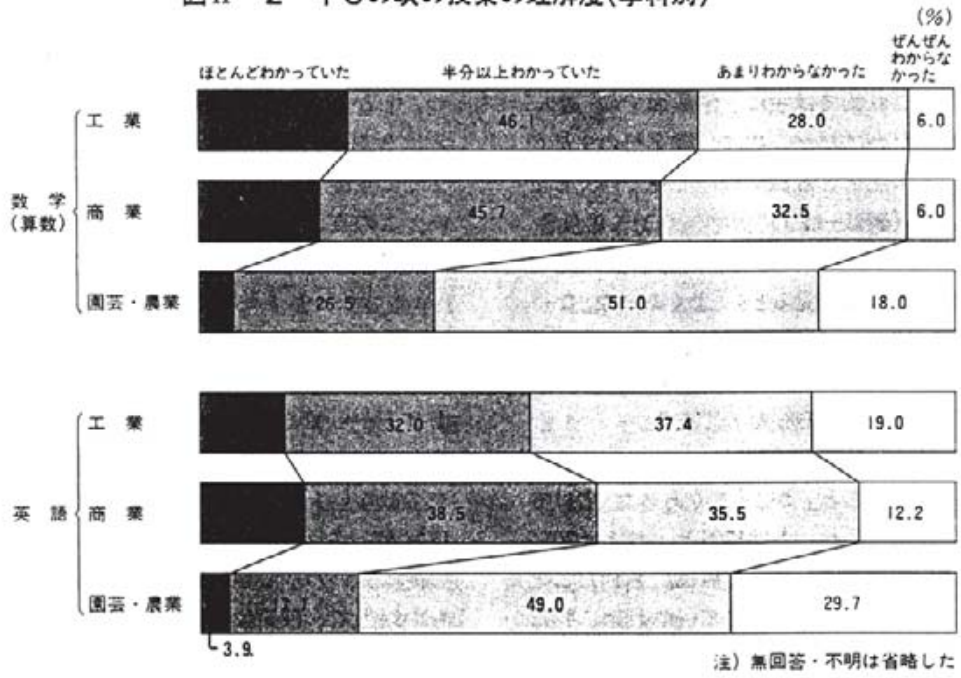
次に、これを学科ごとに比べてみることにしよう。図II－2は、中3の頃について、数学と英語の授業の理解度を学科ごとに示したものである。この図を見ると、数学についても英語についても、商業科、工業科と園芸・農業科との間に大きな差のあることがわかる。数学を見ると、「ぜんぜんわからなかった」者は、商業、工業ともに6％であるのに園芸・農業科では18％である。「あまりわからなかった」者を合わせると、園芸・農業科では、69％に達する。ほぼ7割の生徒が、中学までの数学を理解できずに園芸・農業科に入ってくるのである。

英語の場合はどうだろうか。英語の授業が「ぜんぜんわからなかった」者は、商業科＝12％、工業科＝19％、園芸・農業科＝30％である。「ほとんどわからなかった」と合わせると、商業＝48％、工業＝56％、園芸・農業＝79％になる。園芸・農業の場合、8割におよぶ生徒が、中学までの英語を十分理解できずに高校に進んでいる。

俗に、現代の高校教育を指して「普商工農」という言葉がある。生徒の学力からみて、高校間に普通科―商業科―工業科―農業科という順で格差があるというのである。これまで見てきた結果から、商業と工業との間の格差関係は明瞭に見い出せないものの、商、工業科と農業科との差については明らかであった。一口に職業科といっても、学科によってずい分違いがある。学力水準の問題でも、商業科や工業科は、農業科に比べれば事態はそれほど深刻ではない。農業科に代表される一部の学科に職業科高校の抱える矛盾が集約して表れるのである。

次に生徒の小・中学校時代の成績について、簡単に見ておくことにしよう。表II－1は、小5～6の頃から中学3年の頃までのそれぞれの時期について、クラス内での成績の自己評価を示したものである。大まかな分布を見ると、各時期とも、クラスで上位10番以内だった者、下位10番以内だった者が、それぞれ2割前後、まん中ぐらいだった者が5～6割である。職業科の生徒の大部分は、中以上の

図II－2　中3の頃の授業の理解度（学科別）



注）無回答・不明は省略した

表II－1　小・中学校時代のクラス内の成績(自己評価)

(%)

	全　体			小5～6の頃			中1の頃			中3の頃		
クラス内の成績	小5～6の頃	中1の頃	中3の頃	工業	商業	園芸・農業	工業	商業	園芸・農業	工業	商業	園芸・農業
上位10番以内	12.9	20.3	17.8	30.0	24.5	＞10.6	25.2	24.4	＞5.8	23.5	21.4	＞3.3
まん中ぐらい	55.4	57.8	55.1	51.0	61.8	49.5	57.1	62.5	50.0	56.2	63.8	37.5
下位10番以内	21.0	21.3	26.6	18.2	13.2	＜39.1	17.0	12.5	＜43.2	19.3	14.4	＜58.6

注）＞,＜は統計的に大きな差のあることを示す

成績だったと見ることができる。

これを学科ごとに見ると、ここでも、商業、工業科と、園芸・農業科との違いが目につく。園芸・農業科の場合、中3の頃、うしろから10番以下だった者が約6割を占めるのである。それに対し、上位10番以内の者は、わずかに3%にすぎない。これは、商業科の21%、工業科の24%に比べ、かなり低い値である。つまり、商業や工業の場合には、成績のよい生徒が入学してくることは珍しくないが、園芸・農業の場合には、そのような例はほとんどまれにしか起きないのである。このような点にも、農業科高校の抱える問題が顕著に示されている。

(2)中学時代の生活と意識

さて、これまでは主に、学業面での"過去"を見てきたわけだが、次に、職業科の生徒の中学時代の生活と意識について見ていくことにしよう（表II－2）。

はじめに、「クラスの仲間に親しみを感じたこと」について見ると、「よくあった」ないし、「時々あった」者は、92%に達する。大部分の生徒にとって、中学時代のクラスメートとの関係は良好であったのである。

それでは、教師との関係はどうか。「先生に無視されたこと」が、「よくあった」者は6%、「時々あった」者は17%と、およそ20%の者は、中学の先生から「無視」されたことがあると答えている。そして、これは、特に園芸・農業科に多い。園芸・農業科では28%の生徒が、中学時代に先生から「無視されたことがある」という。すでに中学時代に教師との関係において疎外されていた者が、園芸・農業科に少なからず進学してくるのである。

次に、リーダー経験の有無について見ることにしよう。中学時代に、「クラスやクラブ・部活動、生徒会などでみんなの先に立って活動したこと」が、「よくあった」者は15%、「時々あった」者は30%と、半数近い45%の者が何らかのリーダー経験を持っている。これを学科ごとに見ると、リーダー経験者がもっとも多いのは、工業科の49%、次が商業科の48%、そして、もっとも少ないのが園芸・農業科の31%である。工業や商業では、約半数の生徒が何らかのリーダーとしての経験を持つ。しかし、園芸・農業科ではリーダー経験者は3割にすぎず、大多数の生徒は高校入学までに生徒会活動でのリーダー経験を持たない。この点にも園芸・農業科の問題が示されている。

以上、職業科の生徒の中学校生活について調査の結果を見てきた。ここでの結果から浮かび上がってくるのは、職業科の生徒の大部分が、暗い"過去"を持っているというイメージではない。学業面について見ても、授業の理解度、クラス内での成績ともに、大部分の生徒は、いわゆる落ちこぼれではない。成績も中以上で、授業についても中学までの課程はまあ理解している者が過半数を占める。そ

表II－2　中学時代の生活と意識

(%)

	クラスの仲間に親しみを感じたこと				先生に無視されたこと				クラスやクラブ・部活動、生徒会などでみんなの先に立って活動したこと			
	よくあった	時々あった	ほとんどなかった	ぜんぜんなかった	よくあった	時々あった	ほとんどなかった	ぜんぜんなかった	よくあった	時々あった	ほとんどなかった	ぜんぜんなかった
全体	55.1	36.7	6.2	1.7	5.7	16.5	48.7	28.9	14.8	29.5	36.1	19.5
工業	55.7	36.4	5.5	1.9	7.0	16.5	47.9	28.2	17.9	30.7	33.7	17.2
商業	59.9	34.1	4.9	1.0	4.1	14.4	49.1	32.3	16.3	31.8	35.4	16.4
園芸・農業	45.4	42.0	9.7	2.9	7.1	20.4	48.9	23.4	7.8	23.3	40.6	28.1

して、生活や意識についても、リーダー経験者は4割を超え、教師やクラスメートとの関係においても、大多数は良好な関係をもっていた。特に勉強ができるわけではないが、ごく普通の中学生が職業科に進学しているのである。したがって、職業科だからといってすぐに暗いイメージを思い浮かべるのは正しくない。

もちろん、問題がないわけではない。すでに見たように、職業科といっても学科によって大きな違いがある。そして、今回の調査の結果によれば、職業科の中でも特に園芸・農業科に、学業面でも生活面でも問題を抱えた生徒が数多く入学しているのが示された。このような学科ごとの差異をふまえ、職業科の生徒たちの"過去"を十分理解した上で、現在の指導にあたることが重要であろう。と同時に、このような学科間の差異がなぜ生まれるのかについても、考える必要がある。そして、そのひとつの手がかりは、生徒の高校進学までの過程にあると考えられるのである。

2. 高校受験

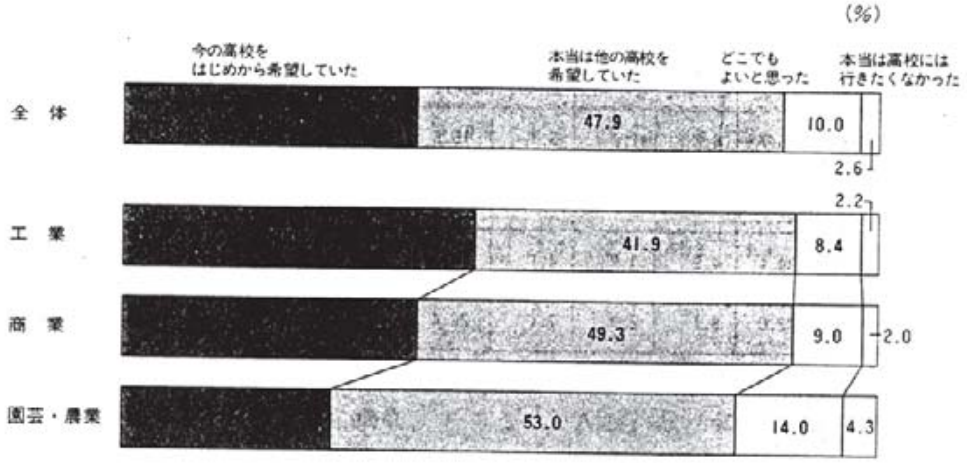
(1)第一志望だったかどうか

それでは次に、職業科の生徒の高校進学までの過程を見ていくことにしよう。彼らは、しかたなく職業科に進んだのか。それとも、自分で進んで職業科を希望していたのか。職業科への進学を決めた動機とその背景について、調査の結果を見ていくことにしたい。

まずはじめに、現在在学している学校が、高校受験の第一志望だったのかどうかを見ることにしよう。図II－3は、この結果を全体および学科別に示したものである。まず全体を見ると、今の学校を「はじめから希望していた」者は39%である。全体の約4割は、第一志望であった。それに比べ、「他の学校を希望していた」と答える者は48%で全体のほぼ半数にあたる。第一志望の者よりも多い。また「どこでもよいと思った」者は10%、「本当は高校には行きたくなかった」という者は3%である。

「はじめから希望していた」者39%、この数字を意外に多いと見るか、それとも少ないと見るかは評価の問題である。しかし、第一志望者が40%近くいるというこの事実から、職業

図II—3　第一志望者の割合



注）無回答・不明は省略した

科に進学する生徒の大部分は、普通科に行けなかったからしかたなく職業科に行ったのだ、というイメージを引き出すことは難しい。少なくとも、約4割の生徒は自ら進んで現在の職業科に進学してきたのである。

とは言うものの、やはり、約半数の生徒が「他の学校を希望していた」という事実もまた忘れてはならない。そして「どこでもよいと思った」者が10%いること、さらに、少数ではあるが、「本当は高校には行きたくなかった」者が3%いること、これらの数値は、高校教育の機関としての職業科高校の意義について、考え直す必要があることを示している。

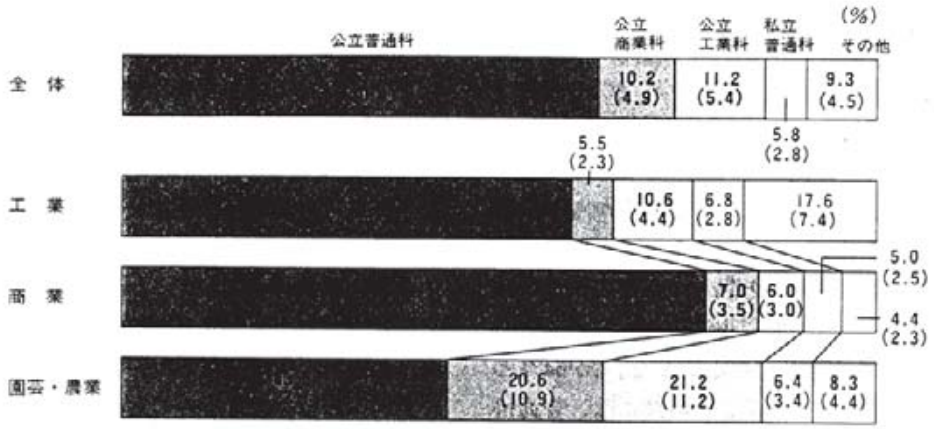
この問題については、本章の最後で考えることにして、ここでは次に、先の結果を学科別に見ることにしよう。図II—3を見ると、学科によって第一志望者の割合に差のあることがわかる。「はじめから希望していた」者が多いのは、工業科の47%、次が商業科の39%である。園芸・農業科の場合は、27%と、第一志望者は3割にも満たない。代わって、「他の学校を希望していた」者は、園芸・農業科では53%を占め、さらに、「どこでもよいと思った」や「本当は高校へは行きたくなかった」も、他の学科に比べて多い。先に、小・中学校時代の授業の理解度や、クラスでの成績の点で、園芸・農業科が商業や工業の下位にあることを見た。ここで見た、第一志望者の比率という点でも、「農」の置かれた位置は、やはり、「工」や「商」よりも低い。不本意就学や学業不振の問題など、農業科に矛盾が集約的に表れるのも、実は成績不振者を本人の希望にかかわりなく農業科にふり分ける高校受験のしくみに一因があると考えられるのである。

さて、すでに見たように全体の約半数にあたる生徒が、現在通っている高校とは別の高校に行きたいと思っていた。それでは彼らは、本当はどんな学校に行きたかったのだろうか。やはり、普通科に行きたかったのだろうか。それを示したのが図II—4である。

まず全体を見ると、「他の学校を希望していた」者のうち、64%は公立普通科高校を希望していたことがわかる。これは全サンプルの約30%を占める。つまり、今回の調査対象者のうち、ほぼ3人に1人は本当は公立普通科高校を希望していたのである。言い換えれば、職業科の生徒のうち約3割は、公立普通科に行きたかったにもかかわらず、何らかの理由で職業科に進学することになったのである。

次にこれを学科別に見ると、興味深い結果

図II－4　第一志望はどんな高校だったのか



注）（　）内の数字は今の学校が第一志望だった者を含めた生徒全体を100%とした時の割合を示す

が見られる。まず商業科の場合、「他の学校を希望していた」者のうち、約8割は公立普通科を希望していた。これは商業科の生徒全体の38%を占める。つまり、商業科に在学している生徒全体の約4割は、本当は普通科に進みたかったのである。商業科の場合、「普商工農」の序列から言っても、普通科の次に位置する。また、教科の点でも、他の学科に比べ普通科に近い。それゆえ、何らかの理由で普通科に進学できなかった者が、次善の策として商業科に進んだと考えることができる。

それに比べ、工業科では「他の学校を希望していた」者のうち、公立普通科希望者は60%である。これは工業科の生徒全体の約25%を占めるにすぎない。つまり、公立普通科高校に行けなくて工業科に進んだ者は4人に1人の割合にすぎないのである。むしろ、工業科の場合には、他の公立工業科に進みたかった者が比較的多い(10%)のが特徴である。工業科の場合、「はじめから希望していた」者が47%と、他の学科に比べもっとも高い比率を占めることはすでに述べた。このことと考え合わせると、工業科の職業高校としての独自性が明らかになる。商業科は、普通科の"受け皿"としてあった。しかし、工業科には職業教育を行う高校としての独自の特徴がある。普通科の代替物ではない工業科の独自性が、これらの結果から浮かび上がってくるのである。

それに対し、園芸・農業科の場合には商業科や工業科とまた違った特徴をもっている。園芸・農業科の場合、「他の学校を希望していた」者は53%ともっとも多い。しかし、その内訳を見ると、公立普通科を希望していた者は44%と商業科や工業科に比べかなり少ない。代わって、公立商業科や公立工業科を希望していた者が、それぞれ21%を占める。つまり、園芸・農業科の生徒で、本当は他の学校に行きたかった者のうち、42%は、商業や工業といった学科の職業科を希望していたのである。これは公立普通科を希望していた者の比率に匹敵する値である。このような結果から、園芸・農業科の場合、他の職業科に行けなかった者が進学してきていると見ることができる。園芸・農業科は、他の職業科の"受け皿"として位置づけられているのである。そして、このように、他の職業科の下位に代替物として位置づけられるところに、すでに見た園芸・農業科の抱える問題の原因があると考えられるのである。

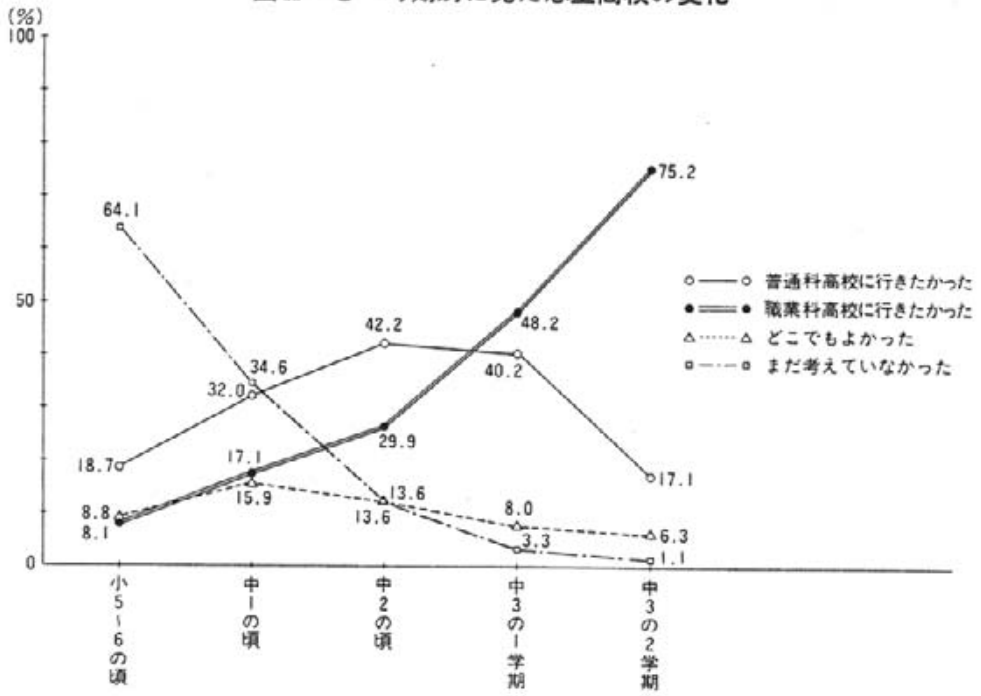
(2)高校選択の過程

それでは、このような高校選択の結果は、どのような過程を経て決定されたのであろうか。ここでは生徒の意識をさらに過去にさかのぼって見てみよう。

図II－5は、小学校5～6年生から、中学校3年生2学期までのそれぞれの時期に、どんな高校に行きたいと思っていたのかを示したものである。まず、小学校5～6年の頃を見ると、「まだ考えていなかった」者が64%ともっとも多い。また、この時期には、普通科高校に行こうと思っていた者(19%)が職業科高校に行こうと思っていた者(8%)を上回っている。その後、学年の上昇とともに「まだ考えていなかった」者は減少する。そして、中学2年の頃までは、普通科高校へ行きたいと思っていた者が、職業科高校を上回っている。この傾向が逆転するのは、中学3年の1学期である。中学3年の1学期になって職業科に行きたいと思う者は、およそ50%に達するのである。とはいえ、この時期でも普通科高校に行きたいと思う者は40%を占めている。高校受験が具体的な問題となり、「まだ考えていない」という者が3%と、ほとんどいなくなるこの段階でも、40%の者は普通科高校に行きたいと思っていたのである。

これらの普通科志願者が一挙に17%までに減少するのは、中学3年の2学期である。この間、職業科へ行きたいと思う者は、48%から75%へと、30%近く増加する。1学期までは普通科志望だった者が、2学期になると職業科へ志望を変えるのである。中学3年の2学期は、周知のとおり高校への進学指導が、具体化・活発化する時期である。このような時期に普通科から職業科に志望変更する者が増える。ここには、中学校の進路指導の影響を受け、受験校を現実的な合格可能な高校に変えていく過程が示されている。図II－6に示すように、現在在学している学校の受験は中学3年の頃の実力からみて、「絶対安全圏」＝25%、「まあ安全圏」＝42%と、約7割の生

図II－5　時期別に見た志望高校の変化

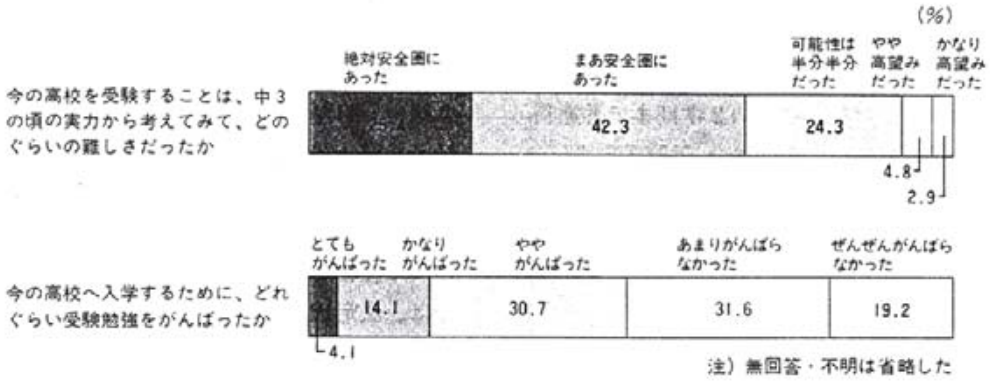


徒は「安全」な選択をしたことになっている。中学では"安全至上"の進路指導が行われているのである。

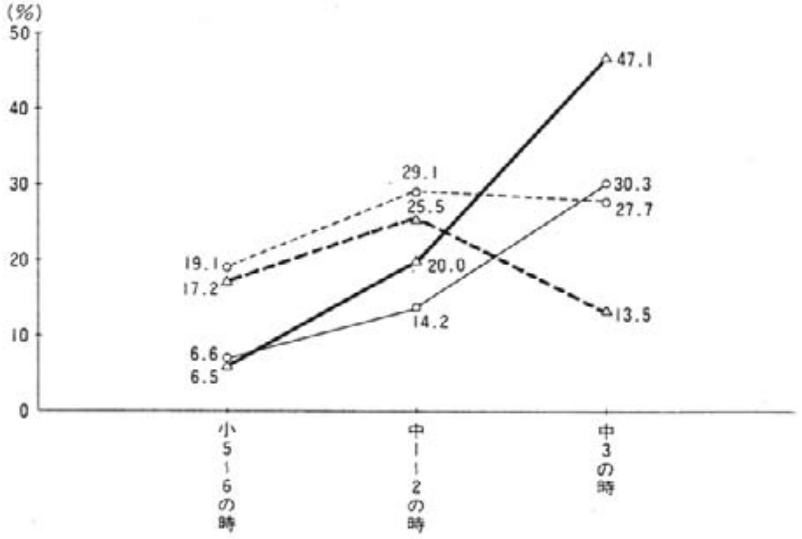
ところが、この場合、"安全至上"の進路指導には、重大な問題が含まれている。同じ普通科の学校間で、"安全"のために、いわゆる"ランク"の一段下の学校に志望を変えるのとは異なり、ここでは、普通科から職業科へという教育課程の異なる学校間での進路変更が行われている。このような変更には、生徒の適性の問題や高校卒業後の進路の問題などが、普通科間の志望校変更以上に重大さを帯びてくるのである。ここでは、高校卒業後の進路希望と志望高校との関連をみよう。

図II－7は、中学3年の2学期に普通科高校から職業科に志望変更した者（図中△印）

図II－6　高校受験の安全度と受験勉強のがんばり度



図II－7　中学3年時に普通科から職業科へ志望変更した者と、一貫して普通科志望だった者の高校卒業後の進路希望の変化



注）△——△ 中3の2学期に普通科から職業科に志望変更した者のうち、高校卒業後に就職を希望する者
○——○ 中3の1、2学期ともに普通科志望だった者のうち、就職を希望する者
○……○ 中3の1、2学期ともに普通科志望だった者のうち、大学進学を希望する者
△－－－△ 中3の2学期に普通科から職業科に志望変更した者のうち、高校卒業後に大学進学を希望する者

と、一貫して普通科を希望していた者（図中○印）とについて、小5～6、中1～2、中3のそれぞれの時期に、高校卒業後の進路をどのように考えていたのかを示したものである。この図を見ると、小5～6の時と中1～2の時には、高校卒業後に就職を希望する者の割合(図中実線)についても、また大学進学希望者の割合(図中点線)についても、両者(○と△）の間に大きな差はない。ところが、中学3年の時を見ると、両者には明瞭な差が表れる。普通科高校から職業科に変更した者の場合、高校卒業後に就職を希望する者は、20%から47%へと大きく増加する。そして、大学進学希望者は、26%から14%へと減少している。それに対し、中3の2学期まで普通科高校を希望していた者の場合、就職希望者は、14%から30%へと増えるが、その増加の幅は志望変更した者よりも小さい。また、大学進学希望者の割合には、ほとんど変化が見られない(29%→28%)。

この結果は、次のことを意味する。すなわち、中学3年の1学期から2学期にかけて行われる進路指導の過程で、普通科高校から職業科へと志望変更が行われる場合、その変更には、同時に、高校卒業後の進路希望の変更が含まれているのである。つまり、普通科高校への進学を断念することは、同時に、大学への進学を断念することと連動しているのである。

(3)高校選択の規定要因

それでは、現在の高校を受験しようと決めた時、何が決め手になったのか。高校進学の過程は、いったい何に規定されているのかについて、調査の結果を見ていくことにしよう。

図II－8は、各項目について受験校決定の決め手として「とても重要だった」と「まあ重要であった」と答えた者の合計を示したものである。まず、全体を見ると、もっとも重要な決め手となったのは「成績」である。71%の者が重要だったと答えている。成績による"輪切り"選抜ということがよく言われるが、志望校の決定に際し、成績は生徒の意識の中でももっとも重要な決定因だったのである。

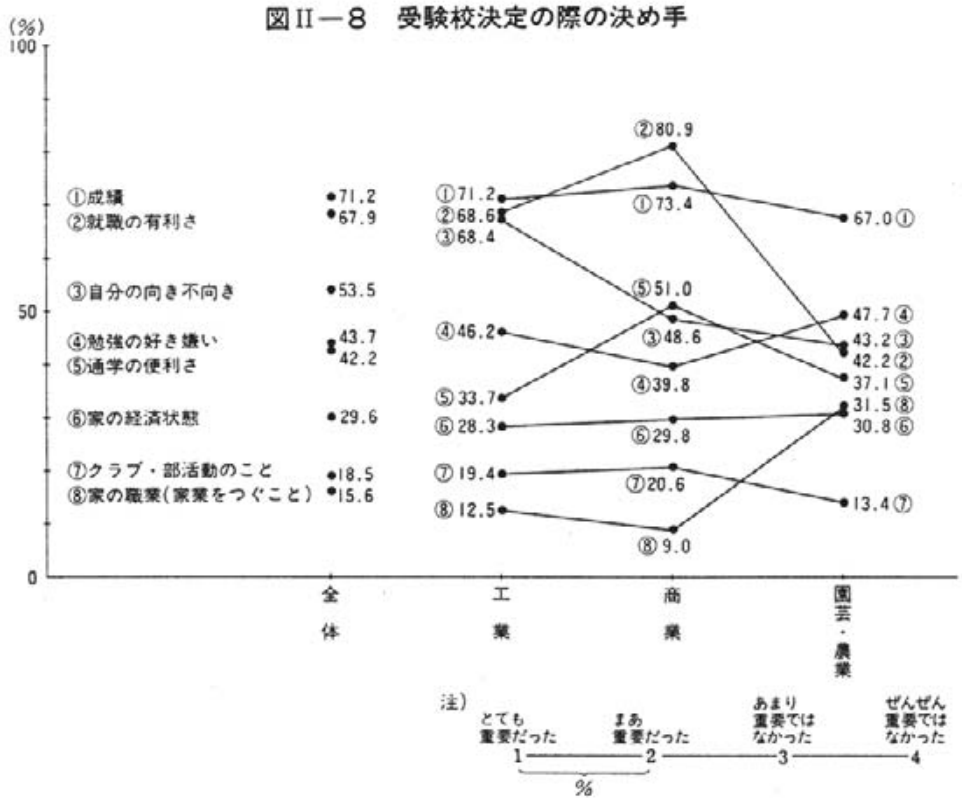
第2位は「高校卒業後の就職の有利さ」の68%である。職業科への進学は高校卒業後に就職することを前提としている。したがって、その際に少しでも就職に有利になるような学校選択が重視されるのである。そして、第3位には、「自分の向き・不向き(適性)」の54%が入る。成績に比べ、適性を重視する者が少ないことは、成績による選抜が適性による選択を上回っていることを意味する。自分に向くかどうかより、高校に入れるかどうかが重視されているのである。

以上がベスト3であるが、以下「勉強の好き嫌い」44%、「通学の便利さ」42%、「家の経済状態」30%、「クラブ・部活動のこと」19%、「家の職業(家業をつぐこと)」16%とつづく。概して、「家の経済状態」や「家の職業」といった社会階層的な要因は、生徒の意識の中では、決定因としてあまり重視されていないことが目立つ。

次にこれを、学科ごとに見ることにしよう。先の図II－8から、各学科の特徴を描くと次のようになる。まず、工業科の特徴は、他に比べ、「自分の向き・不向き」を重視した者が多い点である。およそ7割の生徒が、自分の適性を考えた上で、工業科に進学している。工業科が他の学科に比べ、職業科としての独自性をもっていることは先に述べた。ここに示す、適性の重視という点にも、工業科の独自性が表れている。自分に向いているという判断から、他ではなく工業科に進もうと思った生徒が多いのである。

次に商業科の特徴は、「高校卒業後の就職の有利さ」、「通学の便利さ」を重視した者が多い点である。特に、「就職の有利さ」の重視は、「成績」を上回り、もっとも重要な決め手とみなされている。そして、これは商業科の女子の特徴を表している。商業科の女子で、「就職の有利さ」を重視した者は86%であり、これは男子の67%をはるかに上回っている。高校卒業後に就職しようと思う女子にとって、

図II－8　受験校決定の際の決め手



商業科への進学が就職を有利に導く重要な手段とみなされているのである。

園芸・農業科の特徴としては、「家の職業」を重視する者が比較的多いことと、「自分の向き・不向き」「高校卒業後の就職の有利さ」を重視する者が少ないことを挙げることができる。まず、「家の職業」を重視する者が多いのは、園芸・農業科に農家の子女が多いことと関係がある(巻末集計表参照)。ここではデータを省略するが、親の職業別に見ると、農家の子女ほど、家業をつぐことを重視しているのである。次に、自分の適性を重視する者と就職の有利さを重視する者とが少ないのは、園芸・農業科の抱える問題の一端を示すものである。園芸・農業科が他の職業科の"受け皿"として位置づけられていることはすでに述べたが、ここに示したように生徒の適性や卒業後の進路にかかわらず、他の学科に進学できないという理由で進学してくる者が多いのである。工業や商業の下に位置し、しかも生徒の適性や進路に十分適合できないところに、園芸・農業科の抱える問題の深さが示されている。

最後に、このような高校決定の決め手と第一志望であったかどうかの関係を見ておくことにしたい。**表II－3**を見ると、「家の経済状態」を除いて、他の項目はいずれも、決め手として重視していた者の方が、重要だと思っていなかった者に比べ、今の学校を「はじめから希望していた」者の比率が高い。つまり、これらの項目を十分考えて学校を選んだ者の方が、自分で納得して、自ら進んでその学校に進学しているのである。ここで注目すべきは、「成績」の場合である。「成績」の場合も、それが志望校の決め手として重要であったと考える者ほど、第一志望者の比率は高い。つまり、生徒は自分の成績に引きずられて、しかたなく高校を選んでいるのではなく、自分の成績に見合う高校を進んで希望しているのである。"輪切り"といわれる成績本位の選抜も、このような生徒の了解を経て、納得ずくの選択に姿を変えるのである。

表II－3　受験の際の決め手別に見た
今の高校をはじめから希望していた者の割合

(%)

受験の際の決め手	成　績	家の職業	自分の適性	勉強の好き嫌い	家の経済状態	就職の有利さ	通学の便利さ	クラブ・部活動
重要だった	40.2	43.3	47.4	41.4	37.9	43.6	40.8	42.3
	∨	∨	∨	∨		∨	∨	∨
重要ではなかった	34.7	37.7	28.4	36.4	38.9	28.0	37.1	38.0

注）　表の見方…例えば、受験の際の決め手として「成績」が「重要だった」と思う者のうち、40.2%が今の高校をはじめから希望しており、「重要ではなかった」と思う者のうち、34.7%が今の高校をはじめから希望していた、と読む。

∨＝統計的に大きな差があることを示す

本章では、職業科の生徒の"過去"を、中学校生活と高校受験までの過程の2つの面から見てきた。ここでの分析が明らかにしたのは、職業科の生徒の大部分は、決して落ちこぼれではなく、また、普通科に行けないからしかたなく職業科にきた、というのでもなかった。ごく普通の生徒が多数を占めるのである。

しかし、少数ではあれ、中学までの勉強がほとんどわからず、「高校ならどこでもよい」とか「本当は高校へは行きたくなかった」という気持ちで、職業科に入ってくる生徒の存在も忘れてはならない。果たして、このような生徒にとって職業科高校での職業専門教育は何を意味するのか。本来、適性や志望が重視されるべき専門教育の場に、適性や志望より成績を主要な決定因として、生徒が入学してくる。ここには、高校が行うべき教育とは何か、という本質的な問いが含まれている。

第III章 現在の学校生活

私たちの基本的なねらいは、既に述べたように職業科高校生の生活をありのままにとらえたいということだった。彼らが職業科で教育を受けているという事実に注目した固有の視点が必要なのである。

そこで本章では、

1．高校生活の充実度
2．中学生活と比べて
3．もし普通科に行っていたら
4．職業資格の取得をめぐって

以上、4つの節に分けて論じることにするが、ことに4つめの節では職業科の特色を直接対象として分析する。

職業科をありのままに見ようという私たちの基本的なねらいは、従来の高校研究に対する反省の面を含んでいる。つまりこれまで職業科高校生を、単に普通科に行けず進学競争から脱落したという視点からばかり眺めていたのではないか。そうした視点は半面の真理ではあるかもしれないが、職業科の生徒たちが、職業的価値観や職業意識を形成していくという視点にも注目すべきだろう。

本章で扱う基本的な仮説は具体的には次のようなものである。職業科の高校生たちが、自分の現在の生活を中学校時代や、もし普通科に進学していたと仮定した場合と比べてみると、彼らの職業科の中での生活はこれまで指摘されたような悲観的なものばかりでは決してないだろう。

ではどうしてそうなるのか。そのメカニズムは複雑だが、簡単に言えば私たちは3つのプロセスに注目する。それは第1に職業科教育の生徒に対する適合性、第2に受験生活からの解放、第3が指導的役割の経験である。

まず、第1のプロセスとして、職業科の教育が生徒たちに適合している故に、彼らがより充実した高校生活を送れるという可能性がある。職業の専門科目は役に立つだろうし、興味に合うだろう、また理解も難しくはないだろう。こうした点から職業科教育の適合性を考えることができる。

第2には、第1とかかわっているが、進学のための空しい受験生活からの解放という側面も見落とせないだろう。受験生活からの解放は、直接に、受験のためにほかの貴重な時間がけずられずにすむことである。また学校内で成績による人物評価の原理が薄れていく可能性がある。そのことをとおして、間接的にも解放される。受験がないことで、直接・間接に、仲間との新たな交渉が展開されていくことになる。また就職を目前にしていることともあわさって、おとなへの成長や成熟のための契機が提供されるのである。受験からの解放が生徒の成長の機会となりうるのではないだろうか。

第3には、指導的役割を経験するということの効果である。つまり、成績が上位になることや、クラスで仲間を引っぱって活動するようになることが、生徒たちの自信や誇りを育てはぐくんでいくというプロセスが考えられる。その立論の背景として、前章で述べたように、職業科に入学する生徒の中学校時代の成績は全体として上位の者はさして多くはない。中学での"輪切り"の進路指導のためなのだが、そのため、職業科には同じぐらいの学力の生徒が集まり、どの生徒も上位の成績のとれる可能性がある。そのように上位の立場に置かれ、他の仲間を引っぱっていく経験が増えることによって、自信が生まれ、自分や仲間や学校に対して誇りを持つようになるのではあるまいか。この点は、成績だけでなく、クラス、クラブ・部活動、生徒会のいろいろな活動に言えることだろう。

以上のように職業科の中で、高校生たちが充実した生活を送り、誇りを持って成長していく、その3つのプロセスを仮説として示した。このプロセスがあわさって、彼らは自分の職業観や進路意識を形成していくと考えられる。しかし逆に3つめのプロセスを注意してみれば、やはり職業科高校の現状の問題点もまた浮かび上がってくる。つまり学校の内での相対的な上位という位置に置かれることが生徒たちによい影響を与える可能性もあるが、"輪切り"の指導によって職業科に入学してくる生徒たちは、成績・学力でいうならば、高校生全体の中では上位の位置にあるわけではない。職業科という学科そのものに対する社会の見方は前に述べたように必ずしも好意的ではない。その見方によって、職業科の高校生たちが意気消沈するというプロセスも生じうるのである。いずれの仮説が妥当なのか、データを見ていくことにしよう。

1. 高校生活の充実度

(1)学校生活全体の楽しさ

高校生活の充実度を知るための手がかりとして、まず現在の学校生活は全体として楽しいかを尋ねた。表Ⅲ－1によれば、「とても楽しい」という者は16%、それに「まあ楽しい」という者を加えても、49%であり半数に満たない。

この数値自体は、私たちのサンプルに固有のものであり、職業科全体をこれで判断するわけにはいかない。ただし、どのように楽しさ(つまらなさ)を分けていくプロセスがあるのか、その点は、基礎属性によって推察できる。なお私たちが分析した基礎属性は、性・学科・学年・成績(自己評価)の4つである。

そのクロス集計で見ると性・学科・学年ともに顕著な差異はない。しかし、成績の場合には、かなり顕著な差があり、成績が上位の生徒では、学校生活が「楽しい」と答える者は52%いるのに対して、下位の生徒では42%となっている。それは、冒頭で述べた仮説から見れば、あまり"都合のよくない"結果となっている。つまり、職業科では"受験からの解放"があり、さらに学校内での成績中心原理が崩壊し、それが、生徒の成長のための有効な土壌を形成しているという第2のプロセスに留保が必要になってくる。職業科で成績中心の原理が崩壊していると言っても、それは程度の差というべきで、成績が上位の生徒ほど学校生活を楽しいと感じている者が多いという原理そのものが消滅しているというわけではない。

表Ⅲ－1　現在の学校生活の楽しさ

(%)

		とても楽しい	まあ楽しい	あまり楽しくない	ぜんぜん楽しくない
全体		15.9	32.8	40.9	10.2
性別	男子	15.4	31.2	41.2	12.0
	女子	15.9	32.8	40.9	10.2
学科	工業	16.2	34.1	39.5	10.0
	商業	15.5	34.7	40.7	8.9
	園芸・農業	16.2	27.5	43.1	12.9
学年	1年	20.1	34.8	36.5	8.4
	2年	11.5	29.7	46.6	12.0
	3年	16.1	33.9	39.6	10.2
成績	上位	17.5	34.7	40.2	7.4
	中位	16.8	36.2	39.5	7.2
	下位	13.9	27.9	42.8	15.3

注) 無回答・不明は省略した

(2)学校生活の諸領域の充実度

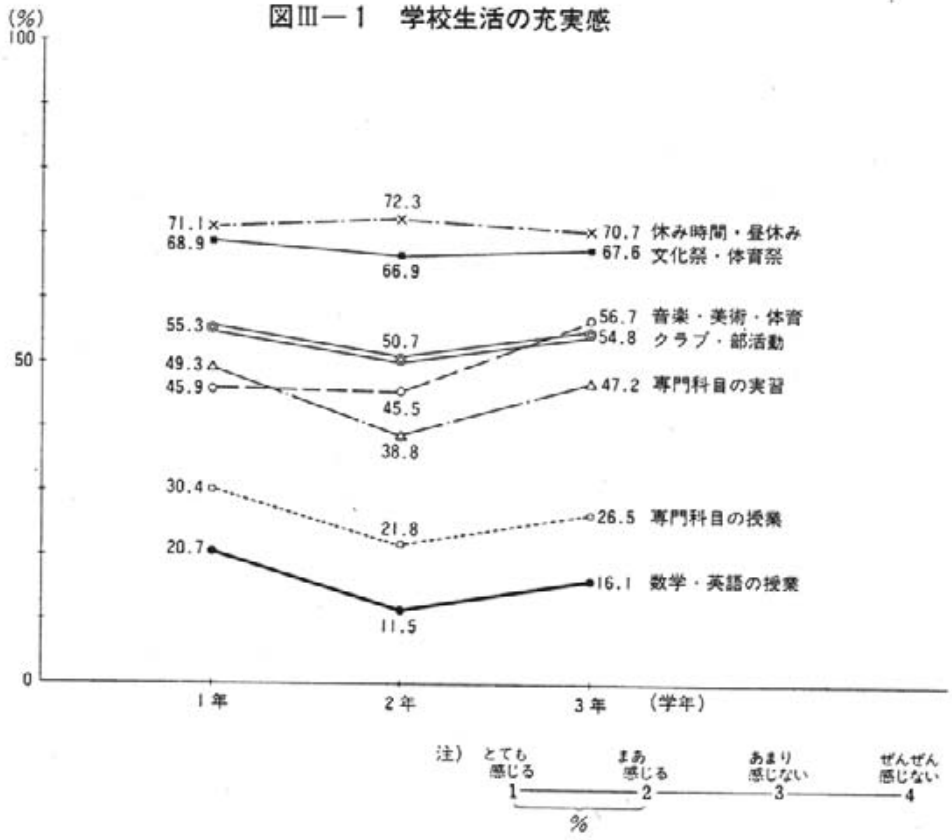
学校生活全体の楽しさというものは、ある領域の充実感や楽しさをとおして生じてくるものであると考えられる。そこで各領域ごとの充実感を示したものが図Ⅲ—1である。これを見ると、学校生活の各領域のうち、はりあいや楽しさを感じる割合の高さから3つのグループに分けられる。つまり、数学・英語の授業と専門科目の授業が第1のグループ、音楽・美術・体育、クラブ・部活動、そして専門科目の実習が第2のグループ、休み時間・昼休みと文化祭・体育祭が第3のグループとなる。言い換えれば、第1のグループは椅子に座って講義を受ける勉強、第2のグループは体を動かす勉強、第3のグループは勉強とは関係ないものである。

重要な点として、この図で比較する限り、職業に関する専門科目が生徒の意識の中で、独自の位置づけを持っているとは言えないということが指摘できる。専門科目の実習と授業との両者間で、充実感を感じるかどうかに約20%の差がある。そして、専門科目の授業と実習に充実感を感じる生徒は、1年から2年にかけて急減し、3年になると実習は1年生の時の比率とほぼ同じぐらいにまで戻るが、講義の楽しさはあまり回復していない。

仲間との親しい交流の持てる休み時間・昼休み、文化祭・体育祭の時間にはりあいや楽しさを感じる生徒は約7割であり、学校生活の充実感や楽しさの源は、友人ということになろう。逆に、講義を受ける勉強に対して、はりあいや楽しさを感じている生徒はわずかに3割である。

なお、学科ごとに見ると専門科目の授業や実習についての充実感には大きな差がある(巻末集計表参照)。

図Ⅲ—1　学校生活の充実感



(3)仲間・教師・校則

学校生活をより詳細に聞いた設問の結果を見ると(表Ⅲ—2)、クラスの仲間に親しみを感じている者は全体の87%、先生に対して親しみを感じている者はその半分の41%となっている。逆に先生から無視されていると思っている者は、34%いる。

この点を成績別に見ると、友人関係については成績による差はないが、先生との関係では大きな違いがある。成績が上位の生徒では50%が「先生に親しみを感じる」と答えるが、下位の生徒では、34%にすぎない。また逆に、「先生に無視されている」という回答は、成績が上位の生徒では31%だが下位では41%になっている。

校則についての意識では、57%の者が「校則を守らないことがある」と回答しており、また「校則にしばられていると感じることがある」と答える者が61%いる。そしてこれを成績別に見ると、上位の生徒は校則にしばられていると思う者が68%と多く、逆に下位の生徒では校則を守らないことがあるという者が63%にのぼる。つまり、成績が上位の生徒は束縛感を強く意識しているが、下位の生徒には束縛感はさほどでなく、現実に校則違反をするという行動レベルで反抗を示している。その意味では、校則に対する拒絶意識は成績の上位・下位を問わず共通して持っているのである。

以上のように、職業科高校生の学校生活をありのままに見ようとすれば、まず第1の知見は、職業科高校といっても普通科高校と全く別種の存在というわけではない、むしろその両者の内部のプロセスは共通しているという点である。進学のための受験教育という面からは解放されているとしても、それによって成績が生徒のフォーマルな地位にかかわり、それ故に学校生活の楽しさや充実度が規定されるというプロセスは消滅しないのである。

表Ⅲ—2　仲間・教師・校則についての意識

(%)

	全体	成績(自己評価)		
		上位	中位	下位
クラスの仲間に親しみを感じる	86.7	88.2	88.9	83.2
先生に親しみを感じること	41.3	49.7	42.6	34.3
先生に無視されていると感じる	34.0	30.5	29.7	41.0
校則にしばられていると感じる	61.4	67.8	61.2	63.9
校則を守らないこと	56.8	50.7	55.6	62.5

注) よくある 1 —— たまにある 2 —— ほとんどない 3 —— ぜんぜんない 4
1—2 を %

2. 中学校生活と比べて

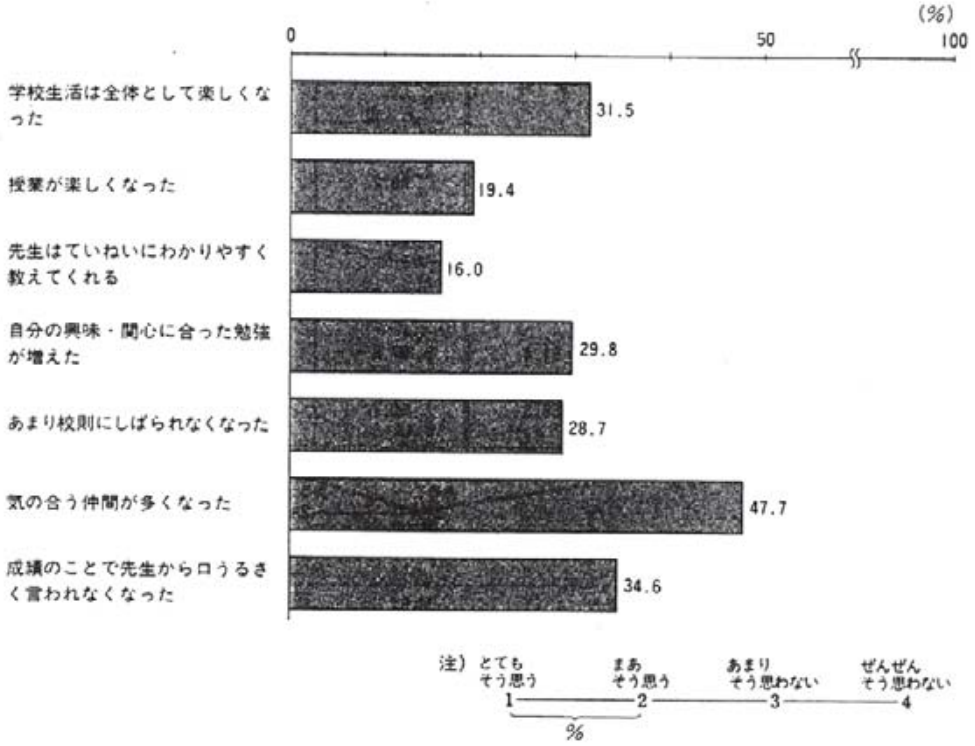
(1)学校生活の変化

第II章で中学生活についての分析をしたが、6割の生徒が「自分は勉強に向いていないと感じたこと」が、「よくあった」あるいは「時々あった」と答えていた。こうした入学者を高校側がどのように処遇しているのか。また中2の時点では4割が普通科の高校に行きたかったと答えている。進路変更を余儀なくされて入学してきた生徒たちをどうするのか。現在の選抜制度を前提とするのならば、この入学者全体に対する対応の仕方こそが、職業教育の評価・診断や改革のキーになるはずである。

図III－2は今の生活を中学時代と比べてどう変わったかを尋ねたものである。いちばん変わったものは「気の合う仲間が多くなった」という項目で、48%の者が「とてもそう思う」あるいは「かなりそう思う」と答えている。以下、「成績のことで先生から口うるさく言われなくなった」が35%、「学校生活は全体として楽しくなった」は32%、「自分の興味・関心に合った勉強が増えた」30%、「あまり校則にしばられなくなった」29%、など、各項目ともに3割前後の生徒にとって、学校生活が肯定的な方向に変化したのだと言える。

「授業が楽しくなった」とか「先生はていねいにわかりやすく教えてくれる」という授業理解にかかわる面では、学校側が十分生徒に対応できているわけではなく、そのように変わったと思う生徒は、いずれも2割程度でしかない。しかし、8割の生徒に対しては「授

図III－2　高校生活と中学生活の差



業の楽しさ」を伝えることができないでいるとしても、2割の生徒の授業への姿勢を変えさせたということは、直接職業科高校での教育の効果とも考えられる。

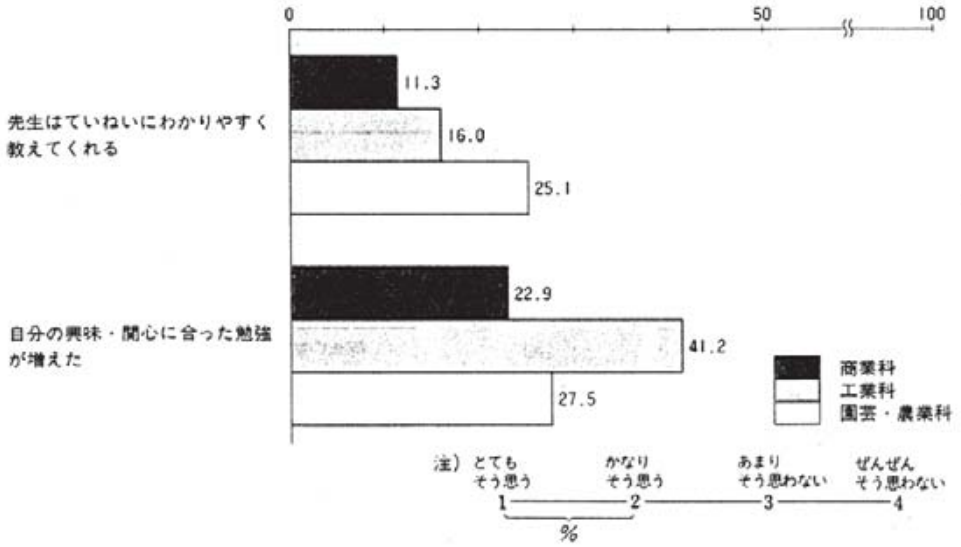
ではどの学科でそうした変化が著しいのだろうか。図Ⅲ－3を見ると、それには2つのパタンがあることがわかる。1つめは、図の上のグラフに示したように園芸・農業科でいちばん変化が大きいものである。「先生はていねいにわかりやすく教えてくれる」と思う者は、商業科ではわずか11%にすぎないのに、園芸・農業科では25%、4人に1人がそう思っているのである。工業科はその中間の値である。グラフは省略してあるがこのパタンに入る項目としては、「成績のことで先生から口うるさく言われなくなった」(園芸・農業科＝41%、工業科＝36%、商業科＝30%）がある。また「授業が楽しくなった」という者も園芸・農業科では26%いる。

2つめのパタンは図Ⅲ－3の下のグラフに示されたもので、工業科に変化が著しい。「自分の興味・関心に合った勉強が増えた」と思う者は工業科で特に多く、41%がそう思うのである。同じく「あまり校則にしばられなくなった」という項目でも工業科で39%、他が25%前後となっている。

少しこの変化を考えてみると、工業科の場合で言えば、他の学科と比べて、早くから職業科へ入学しようと考えていたのだろうし、また「自分の向き・不向き」を重視して志願してきた比率が大きいからではないだろうか。つまり、商業科や園芸・農業科と比べて専門志向が強い生徒が入学してくるため、職業科目に意欲を持って取り組めるのだろう。なお校則の問題は、今回の調査の対象とした工業科校が偶然校則の厳しくない学校ばかりだったのか、それとも何らかの必然性があるのか、ここでは解明できない。

次に園芸・農業科の事情を考えてみよう。この学科に入学している生徒の6割は、中学校時代の成績が下位から10番までの内にいた。中学校時代彼らは授業の中ではいわゆる"お客さん"だったのではなかろうか。しかし彼らも受験しなければならない。受験に際して先生から成績のことでは絶えず口うるさく言われる、そうした中学校時代だったのかもしれない。では、高校進学後はどうなのか。高校では彼らの学力に合わせて授業がすすめられ、少しずつだが「授業が楽しく」なっているのかもしれない。今回の対象で言えば、3学科中でもっとも中学校時代の成績が低い園芸・農業科において、いちばんその効果が明白に表れているのではないだろうか。

図Ⅲ－3　学科別の高校入学後の変化



(2)学校生活変化の規定要因

高校生になって中学校の頃よりも「学校生活が全体として楽しくなった」という者は32%を占める。少なくとも3分の1近い生徒にとって、職業科への進学は中学校時代よりも楽しい学校生活を送れる条件となったのである。それでは、いったい何がこのような変化を生んだのだろうか。学校生活を楽しくさせた規定要因について分析を進めていくことにしよう。

表Ⅲ－3を見てみよう。まず、高校受験との関連を見ると、「今の学校をはじめから希望していた」者ほど、中学校時代より今の学校生活の方が楽しくなったと答えている。また高校選択に際し、「自分の向き・不向き(適性)」を重視していた生徒は、重視しなかった者よりも、学校生活が楽しくなったと感じている。つまり、高校受験において、自分の志望と適性にかなった高校選択をした者ほど、中学校時代より高校に入ってからの学校生活の方が楽しいと評価しているのである。これは別の角度から見れば、職業科の教育が、生徒の志望や適性に適合している場合には、普通教育中心の中学校に比べ、より充実した高校生活を生徒に提供できることを示唆している。

次に、職業科の特徴である、職業専門科目について見ると、専門科目を「半分以上わかっている」者は、「あまりわからない」者に比べ、学校生活が楽しくなったと答えている。また、専門科目の勉強と深くかかわっている「資格取得のための勉強」について見ると、「資格を取るために一生懸命勉強した(している)」者ほど、「楽しくなった」という回答が多い。これらの結果から考えて、職業科独自の教育をうまくこなし、専門科目の勉強に強い動機づけを持った生徒たちが、現在の高校生活を中学校時代に比べ、より楽しく感じているとみることができる。ここでも、職業科の教育が生徒に適合していることが、生徒の学校生活を変える要因になっているのである。

表Ⅲ－3　学校生活の楽しさの変化を規定する要因

(%)

楽しさの規定要因		なった楽しくなったく	そうでないで
高校受験	はじめから今の学校を希望していた	35.9	64.1
	他の学校を希望していた	29.7	70.3
	どこでもよいと思った	27.2	72.8
	本当は高校には行きたくなかった	20.0	80.0
高校受験の決め手	自分の向き・不向き(適性)が重要だった	36.3	63.7
	自分の向き・不向き(適性)は重要ではなかった	26.1	73.9
専門科目の授業	半分以上わかっている	35.7	64.3
	あまりわからない	26.1	73.9
資格	資格を取るために一生懸命勉強した(している)	34.8	65.2
	資格を取るために一生懸命勉強していない	26.8	73.2
現在の成績	上　位	35.7	64.3
	中　位	33.8	66.2
	下　位	26.6	73.4
指導者としての経験	クラス、クラブ・部活動、生徒会でみんなの先に立って活動することがある	41.9	58.1
	クラス、クラブ・部活動、生徒会でみんなの先に立って活動することがない	28.8	71.2

このように、中学校にはなかった職業専門教育を提供することは、それが生徒の志望や適性、学力や動機づけにうまく適合する場合には、普通教育だけでは達成できない生徒の変化を導き出すことができる。しかし、この結果を逆に見れば、職業科の教育が生徒に適合しない場合には、十分な成果が得られないということでもある。その意味で生徒の志望・適性・学力に応じた高校進学の指導が可能か否かが、職業科の教育の成功の鍵であると言えよう。

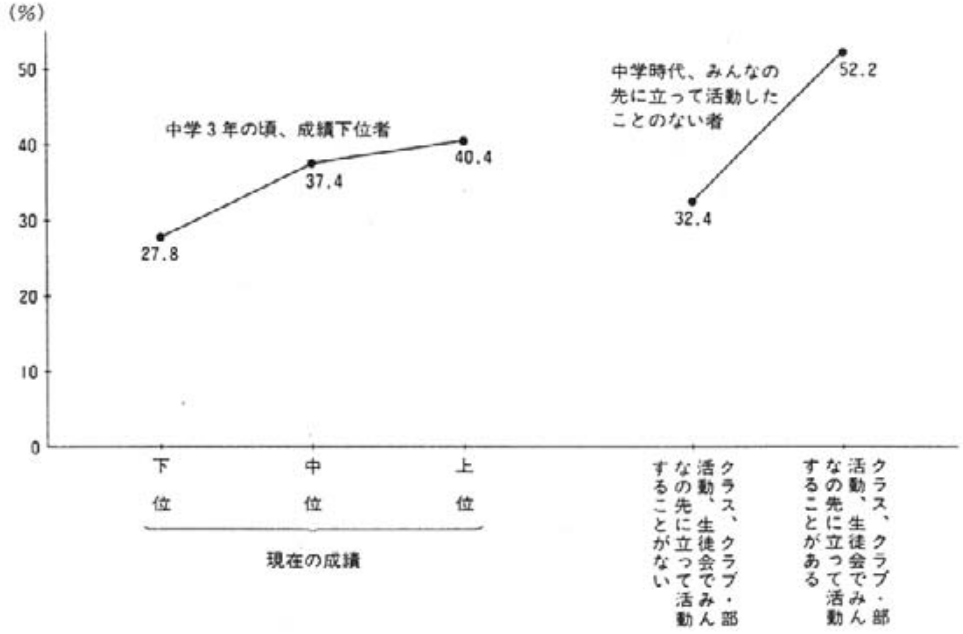
それでは、高校での新たな成功経験や指導者経験の有無との関係はどうだろうか。成績の上・中位者は下位者に比べ、そして、「クラス、クラブ・部活動、生徒会でみんなの先に立って活動すること」がある者はない者に比べ、中学校の頃より「学校生活が楽しくなった」という回答が多いのである。

これを中学校時代の経験との関連で示したのが、図Ⅲ－4である。まず中学校時代に成績下位者であった生徒の現在の成績と、学校生活の楽しさの変化との関連を見ると、成績上位者ほど、中学校の頃より学校生活がより楽しくなったと答える者が多い。学業面での新たな成功経験が、学校生活を変えているのである。

また、図Ⅲ－4で、中学校時代に指導者としての経験がなかった者のうち、高校に入ってから指導者経験を持つようになったかどうかと、学校生活の楽しさの変化の関連を見る。すると、中学校時代には指導者としての経験がなかった者でも、高校入学以後、そのような経験を持つようになった場合には、中学校時代より現在の高校生活の方が楽しくなったと答えているのである。

このように、高校進学の結果、中学校では体験できなかった成功経験や指導者としての経験を持つことによって、学校生活にポジティブな変化が生じうるのである。

図Ⅲ－4　中学校と比べて高校生活が楽しくなったと思う者の割合



3. もし普通科に行っていたら

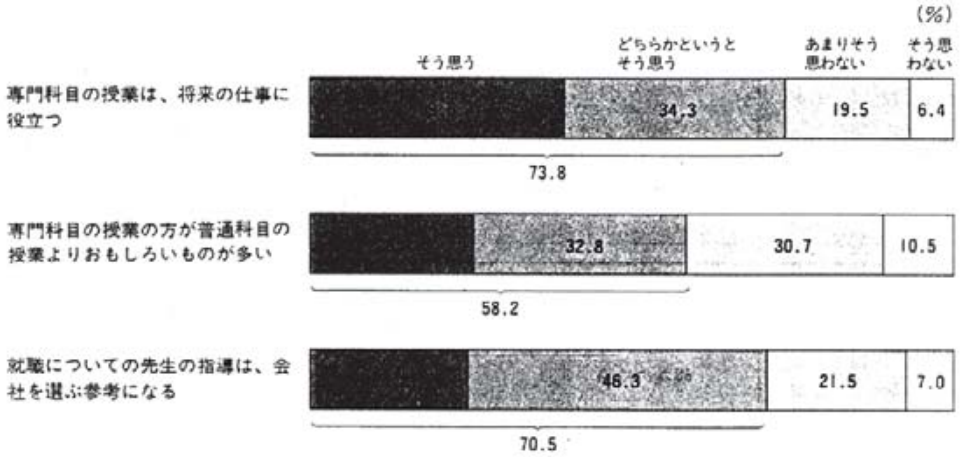
(1)職業科の教育に対する評価

前節では、中学校生活との比較という点から、職業科の生徒の高校生活を見た。そして、ひとつの知見として、職業科の教育が生徒に適合しているか否かが、高校入学以後の学校生活の"好転"を促す要因であることがわかった。そこで、ここではさらに、普通科高校にはない職業科の独自性が、生徒の学校生活にどのような影響を及ぼしているのかを見ていくことにしよう。

はじめに、図Ⅲ－5を見よう。この図は、職業科の独自な教育について、生徒がどのように評価しているのかを示したものである。まず、専門科目の授業についての評価を見ると、「将来の仕事に役立つ」と思う者は74%(「そう思う」40%、「どちらかというとそう思う」34%)であり、多くの生徒が、専門科目は将来の仕事に役立つと評価している。また、「専門科目の授業の方が、普通科目の授業よりおもしろいものが多い」と思う者は25%、「どちらかというとそう思う」者33%と、合わせて58%の者が、専門科目の方をおもしろいと思っている。このように、職業科の生徒の大半は、専門科目の授業を、将来の仕事にも生かせるし、現在の学校生活においても普通科目の授業より興味のわく授業であると考えている。職業専門教育を受けることに、生徒の多くは肯定的な評価を下しているのである。

そればかりではない。「就職についての先生の指導は、会社を選ぶ参考になる」と思う者は24%、「どちらかというとそう思う」者は46%いる。70%の生徒が、職業科における就職指導を肯定的に評価している。就職の指導は、点数だけで決まる進学指導に比べ、長い経験と専門性が要求されると言われる。職業科の教育は、専門科目による職業専門教育にとどまらず、このような就職指導をも含めて"職業教育"に貢献している。生徒の多くも、その点を高く評価しているのである。

図Ⅲ－5　職業科の教育についての生徒の評価



注）無回答・不明は省略した

(2)普通科に行っていたら

次に、普通科とは異なる職業科の特徴をさらに詳しく見ていくことにしよう。今回の調査では、生徒の意識の中にある職業科の教育の独自性を探るために「もし、学力の点でほとんど変わりない普通科に通学していたとしたらどんな高校生活になっていたと思うか」という質問を試みた。

普通科に行っていた場合の高校生活と比べることによって、逆に現在の職業科での高校生活の独自性を明らかにしようとしたのである。結果は、表Ⅲ—4に示すとおりである。

まず、学業の面について見ることにしよう。普通科の高校に行っていたら、「専門科目の勉強がなくてつまらないだろう」と思う者は、38%(「とてもそう思う」と「かなりそう思う」の合計、以下同じ)で、約4割の生徒は専門科目の勉強があることを肯定的にとらえている。また、普通科だったら「勉強が難しくてついていけないだろう」と思う者は55%いる。学力の点でほとんど変わらない普通科と職業科とで、勉強の難しさに本当に違いがあるのかどうかはわからない。しかし、職業科の生徒の目から見れば、数学や英語などの普通教科だけの時間割よりも、実習や実験などを含む職業専門科目の入った時間割の方が、自分に合っており、難しくないと思えるのであろう。ともかく、職業科に専門科目の授業があることは、積極的な意味でも消極的な意味でも、生徒の意識に職業科の教育の独自性を植えつけているのである。

次に、上級学校への進学意識や受験勉強について見よう。普通科に行っていたら「進学する気になるだろう」と思う者は47%である。職業科にいる現在、各種・専修学校から短大・大学を含めて、高校卒業後に進学するつもりである者は18%である。この数字と比べると、普通科に行っていたら進学する気になっただろうと想定する者は、30%ほど多い。つまり、今回の調査対象者のおよそ3人に1人は、普通科に行っていたら進学する気になっていたであろう高校卒業後の進路意識を、実際には職業科に進んだことで変更した者たちなので

表Ⅲ—4　もし、普通科に進学していたとしたら、どんな高校生活になっていたと思うか

(%)

項目 ＼ 尺度	とてもそう思う	かなりそう思う	あまりそう思わない	ぜんぜんそう思わない
専門科目の勉強がなくてつまらないだろう	14.3	23.8	45.0	16.7
	38.1		61.7	
勉強が難しくてついていけないだろう	22.2	33.2	36.2	8.1
	55.4		44.3	
進学する気になるだろう	17.7	29.4	30.0	22.7
	47.1		52.7	
受験勉強のあくせくした雰囲気に息がつまるだろう	32.1	31.9	28.0	7.8
	64.0		35.8	
もっとハリのある生活ができるだろう	8.1	13.9	52.4	25.3
	22.0		77.7	
就職するための指導をあまりしてもらえないだろう	18.9	35.2	37.9	7.7
	54.1		45.6	
よい会社には就職できないだろう	11.0	21.8	51.8	15.2
	32.8		67.0	
地域の人は自分を今より高く評価してくれるだろう	8.3	16.4	51.9	23.1
	24.7		75.0	

注）無回答・不明は省略した

ある。ここには、普通科＝上級学校への進学、職業科＝就職、という高卒後の進路に対する色分けが生徒の意識の中にあることが示されている。

どのコースに進むかによって、その後の進路が規定されるような構造を、陸上競技のトラック（コースごとに線で区切られていて、一度あるコースを取ったら、他のコースへは移れない）に例えて、"トラッキング"という。ここに示した結果は、職業科の生徒の意識の中にこのようなトラッキングが形づくられていることを示している。これは、高校の側から見れば、職業科には進学ではなく就職という進路が予定されていることを意味する。一見あたりまえのようにも見えるが、これは職業科の重要な機能である。職業科の独自性の1つは、それが高校卒業後の就職という進路と強く結びついた学校だ、という定義である。この定義を生徒が内面化していることによって、生徒自身納得ずくで、進学ではなく就職という進路を選びとることができるのである。

このように、職業科＝就職、普通科＝進学という一種のレッテルがそれぞれの高校に貼られている。そして、普通科の場合、進学ということから、さらに受験勉強ということが関連してくる。普通科に行っていたら、「受験勉強のあくせくした雰囲気に息がつまるだろう」と答えた者は、64%にもおよぶ。裏返せば、職業科に進んだことで、そうした受験の雰囲気からのがれられたと評価する者が多数いるのである。そして、このような、普通科＝進学＝受験勉強という関連からか、普通科に行っていたら、「もっとハリのある生活ができるだろう」と思う者は、22%とわずかしかいない。つまり、職業科の多くの生徒は、普通科に行ったからといって、「ハリのある生活」ができるとは考えておらず、かえって受験勉強にあくせくして、息がつまってしまうだろうと思っているのである。これは、逆に見れば、受験から解放されている現在の高校生活の方が、「ハリのある生活」ができている、という評価になるのではないか。

次に、就職との関係を見よう。普通科に行っていたら、「就職するための指導をあまりしてもらえないだろう」と思う者は、過半数の54%におよぶ。普通科では、就職のための指導は不十分だろうという評価が生徒の中にあるのだ。これを逆に見れば、職業科での就職指導が、それなりに評価されていることを意味する。就職指導という点でも、職業科の独自性が積極的に評価されているのである。しかし、その反面、普通科に行っていたら「いい会社に就職できないだろう」という回答は、33%と思ったより少ない。職業科に進んだからといってそれほど就職に有利だとも考えていないのである。

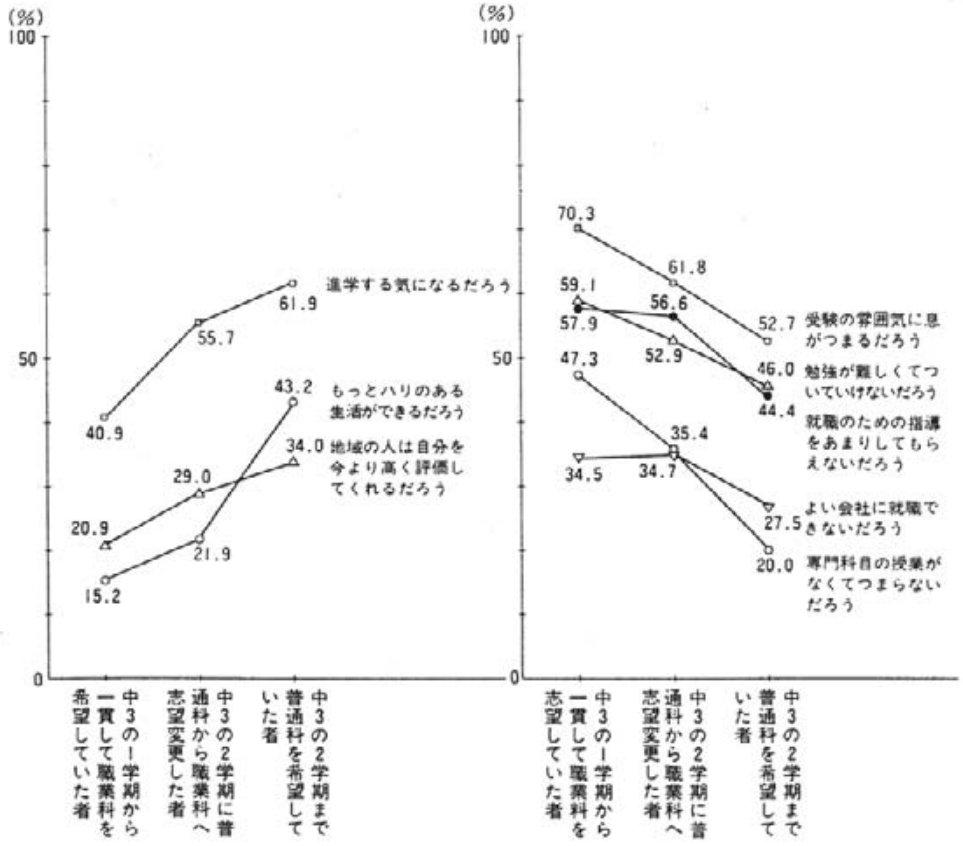
次に、世間からの評価ということについて見よう。職業科は普通科より、「格」が低いと言われることがある。しかし、生徒の意識を見る限り、そうでもない。普通科に行っていたら、「地域の人は自分を今より高く評価してくれるだろう」と思う者は、25%にすぎないのである。つまり、「学力の点でほとんど変わらない」ような普通科であれば、職業科に比べ必ずしも高い威信が得られるわけではない、ということだろうか。学力さえそう違わ

なければ、生徒にとって、普通科だ、職業科だ、ということでの「格差」意識はそれほどないのである。

さて、最後に、高校進学の際の意識との関連で、これまでの結果を考えてみることにしよう。図Ⅲ—6は、中学3年の1学期から一貫して職業科を希望していた者のグループと、中3の2学期に普通科から職業科に志望変更した者のグループ、さらに中3の2学期までは普通科に進学したいと思っていた者のグループについて、それぞれ先の「普通科に進学していたら……」という質問の回答を示したものである。まず、左側のグラフは、遅くまで普通科志望だった者ほど回答率が高い項目を示している。普通科に行っていたら、「進学する気になるだろう」、「もっとハリのある生活ができるだろう」、「地域の人は自分を今より高く評価してくれるだろう」といった、普通科を積極的に評価する項目である。普通科に行きたかった者ほど、普通科をよく見ているのである。これは、逆に見れば、中学での進路指導の結果、やむなく職業科に進学することになった生徒ほど、普通科に行けなかったことの無念さを、このような評価に表しているのだと見ることができる。

上級学校への進学ということについて見ると、中3の2学期まで普通科志望だった者の26%が、現在進学を希望している。普通科に行っていたら進学しただろうと想像している生徒は62%で、差し引き36%の者が職業科に進んだことによって上級学校への進学をあきらめていることになる。「もっとハリのある

図Ⅲ—6　高校進学の意識別に見た「もしも、普通科に進学していたら…」



生活ができるだろう」ということについても、裏返せば、現在の職業科での生活に「ハリ」のないことを示しているのかもしれない。そして、普通科志望だった者ほど、普通科に行っていたら、地域の人から今より高く評価してもらえるだろうと思うのも、現在不本意ながら職業科に在学していることが、何らかの劣等感につながっているからかもしれない。

次に図Ⅲ—6の右側のグラフを見てみよう。これは左図とは反対に、早くから職業科志望を一貫して持っていた生徒ほど、高い回答率を示す項目をまとめたものである。図を見ると、「専門科目の授業がなくてつまらないだろう」、「受験勉強の雰囲気に息がつまるだろう」、「勉強が難しすぎてついていけないだろう」、「就職のための指導をあまりしてもらえないだろう」、「よい会社に就職できないだろう」など、普通科への否定的な評価が集まっている。つまり、早くから職業科を希望していた者にとっては、普通科に行っていたら"受験勉強に息がつまり、勉強にもついていけず、専門科目のないつまらない学校生活になってしまう上に、就職指導も十分してもらえず、その結果、よい会社にも入れなくなるだろう"という評価が支配的なのである。これは逆に見れば、職業科を希望して入学してきた生徒ほど、職業科の独自性を肯定的に評価していることになる。普通科ではなく職業科に進学してよかった、という気持ちが表れているのかもしれない。

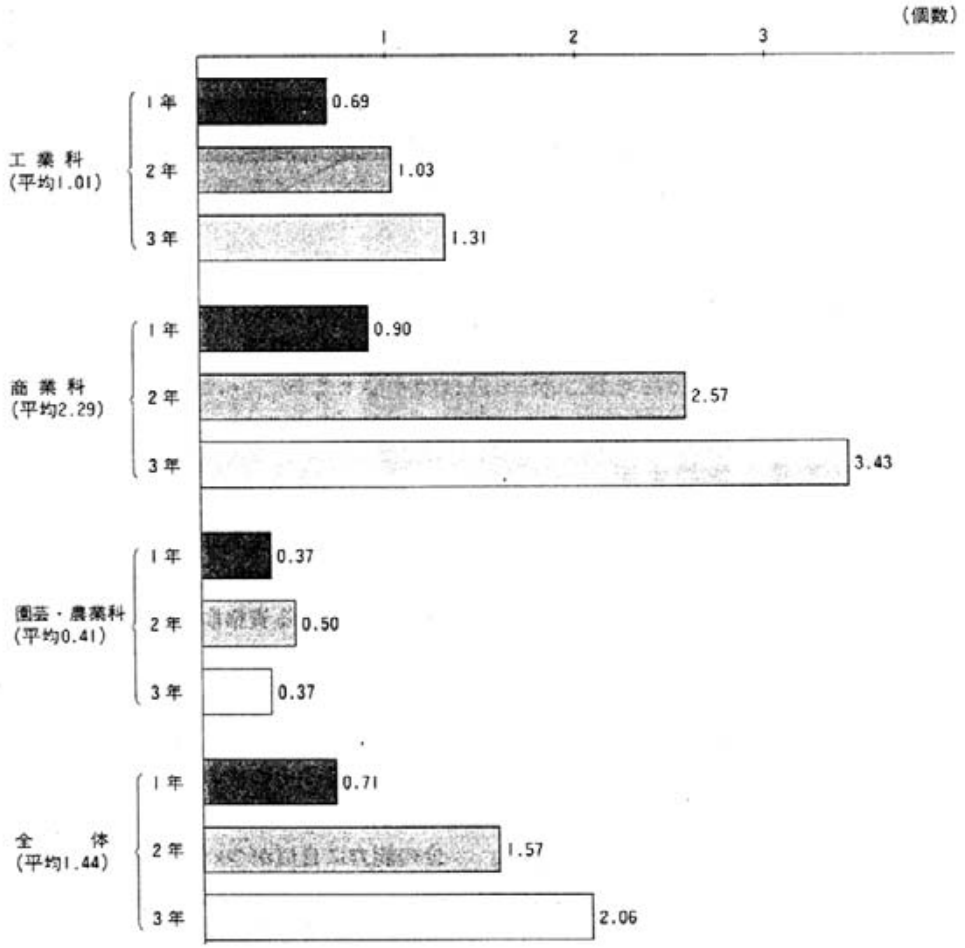
ともあれ、以上の結果は、職業科への進学が生徒の志望にマッチしていたかどうかが、職業科の独自性の効果を規定していることを示している。職業科が普通科にはない教育を施すことが、生徒にとってプラスとなるかマイナスとなるかは、生徒の志望に基づく高校進学が行われているか否かにかかっているのである。しかし、実際には、自分の志望とは異なる高校に進学してくる生徒がいることも事実である。このような生徒に、いかに対応しきれるか、というところに職業科の課題があると言えよう。

4. 職業資格の取得をめぐって

(1)学科・学年別資格取得数

図Ⅲ－7は、学科・学年別に資格取得数の平均を見たものである。学科別に見ると、商業科の生徒がもっとも多く所持しており（生徒1人あたり2.29個）、つづいて工業科(1.01個)、園芸・農業科(0.41個)となっている。商業科の場合、簿記、珠算の資格を取得することが当然視され、また学校も授業中および補習授業において強力な指導を行っている。こうしたことが、平均で2.29個の資格を所持しているという結果をもたらしたのであろう。学年別に見ると、農業科では、学年が上がっても平均所持数は増えず、逆に2年生と3年生を比較すると3年生の方が少なくなっている。工業科と商業科では、学年が上がるにつれ、資格の平均所持数は増えている。特に商業科では、1年から2年にかけて、平均で0.9個から2.57個へと実に1.67個も増えている。

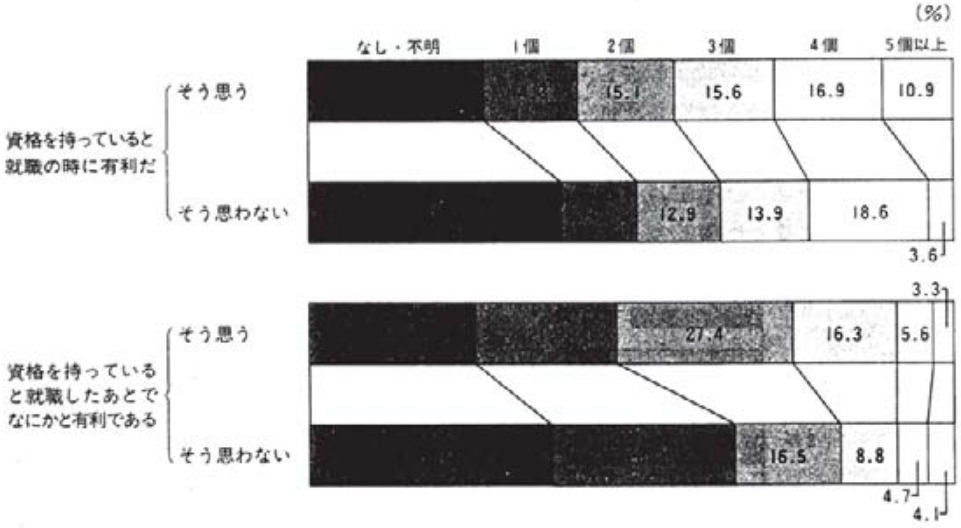
図Ⅲ－7　学科・学年別資格取得数の平均



(2)資格取得の理由

資格取得の理由としては、図Ⅲ－8に示したように、「資格を持っていると就職の時に有利だ」、「資格を持っていると就職したあと何かと有利である」があった。「資格を持っていると、就職の時に有利だ」と思う生徒のうち、2個以上資格を持っている者が59%であるのに対し有利だと思わない生徒では49%である。また「資格を持っていると就職したあとで何かと便利だと思うか」という質問で、そう思うと答えた生徒のうち、2個以上資格を持っている者は53%、これに対して、そう思わないと答えた生徒では、資格を2個以上所持している者は34%となっている。資格取得は、就職時や就職後の有利さを考えてなされていると言えよう。

図Ⅲ－8　資格取得についての考えと資格取得数(3年のみ)



(3)職業資格の取得と学校生活

以上見たように、資格は就職時や就職後の有利さを理由に取得される。しかしながら、資格の取得は、そうした有利さにのみ影響をおよぼすのではない。彼らの学校生活そのものにも影響をおよぼす。表Ⅲ－5は、資格取得が学校生活にどのような影響をおよぼしているかを見たものである。

まず、資格取得のための勉強と他の勉強との関連を見たものが、「資格取得のための勉強は他の勉強よりやる気が出る」という項目である。約3分の2の者が資格取得のための勉強の方がやる気が出ると答えている。またこれを裏づけるように全体の56%が、「資格を取るために一生懸命勉強した」と答えている。職業科の高校生にとって、いろいろな勉強の中に占める資格取得のための勉強の比重は非常に大きいと言えよう。

さらに、資格の取得は自信の源泉へとつながる。一生懸命勉強した結果得られる資格は、単に就職時やその後の有利さだけでなく、自信をもたらすのである。「資格が取れて自分の能力に自信がついた」とする者は全体で51%におよび、資格取得によって自信を持ったとしているのである。さらに、こうした傾

表Ⅲ—5　資格取得と学校生活

(%)

	1　年	2　年	3　年	全　体
資格取得のための勉強は他の勉強よりやる気が出る	64.4	66.5	65.6	65.5
資格を取るために一生懸命勉強した(している)	53.4	56.7	56.7	55.6
資格が取れて自分の能力に自信がついた	47.0	50.6	53.4	50.5

注）そう思う 1 ―― やや そう思う 2 ―― あまり そう思わない 3 ―― そう 思わない 4
（1＋2＝%）

向は1年生が47%、3年生が53%と学年が上がるにつれて強まる。資格は就職に有利であり、生徒はそのために一生懸命勉強する。その上、それはやる気が出る勉強であり、また、資格試験の合格は彼らに自信を与えるものなのである。

本章では、職業科の高校生たちの"現在"を見た。ここでの分析の結果明らかになったのは、職業科高校の"可能性"である。職業科の教育が生徒の適性や志望にマッチしている場合には、生徒の学校生活は"好転"する。普通教科だけの中学生活より充実した高校生活を提供することができる。そして、中学校では味わえなかった成功経験や指導者としての経験を与えることも、学校生活を"再生"する可能性を持っていた。このような可能性を軸に、職業科の独自性を維持していくことが重要である。

と同時に、職業科には、適性や志望がマッチしない生徒が進学してくること、職業科に進んでも、成功経験やリーダーとしての経験を味わえない者がいることを忘れてはならない。このような生徒たちが、他に行き場がなく職業科に進まざるを得ないところに、高校教育の抱える問題がある。この問題にどう立ち向かっていくか。職業科の可能性が試されているのである。